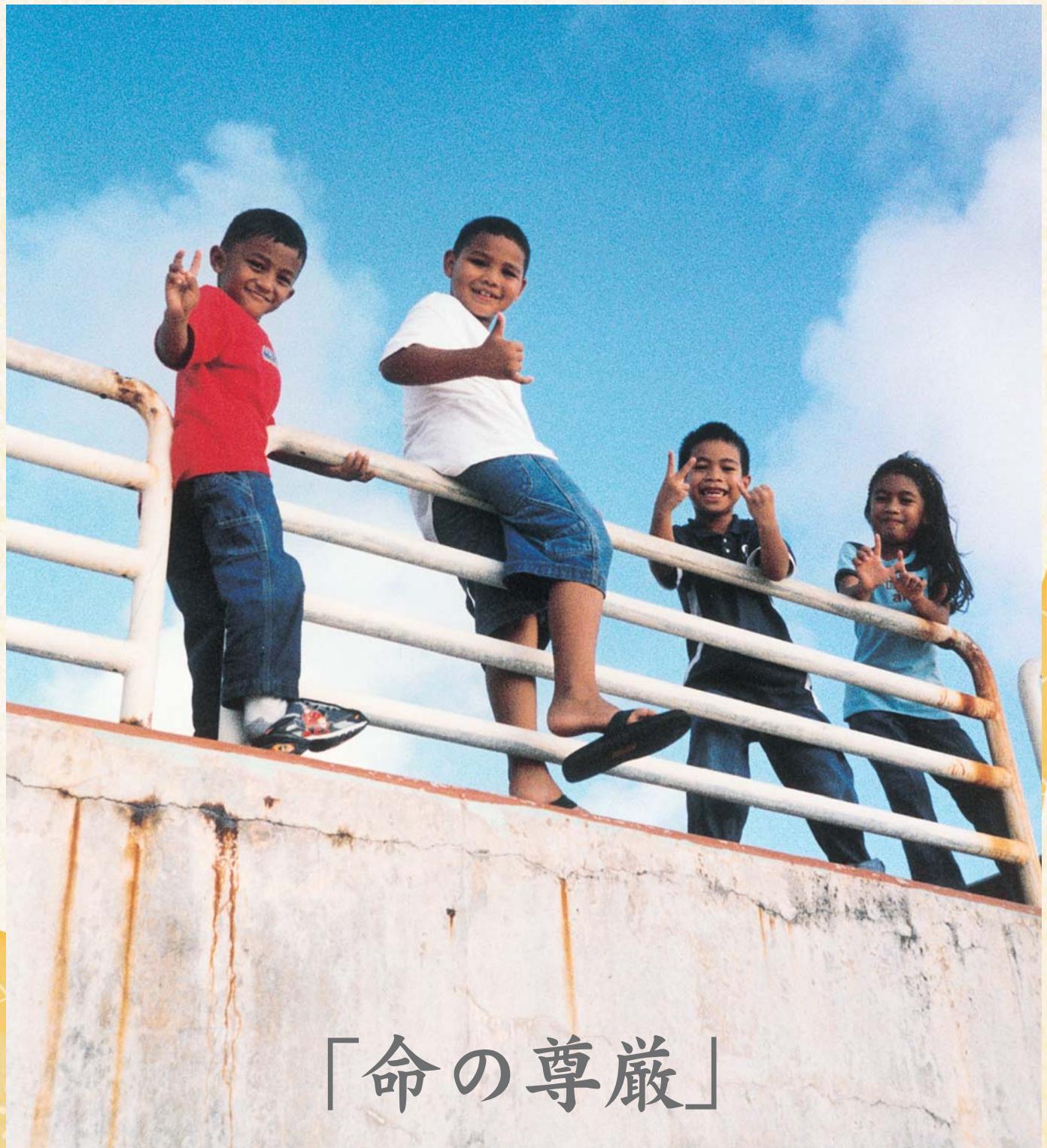


# 法華宗信報

皆様に役立つ情報をお届けします。

No.126

発行 法華宗宗務院  
法華宗ホームページ  
[www.hokkeshu.or.jp/](http://www.hokkeshu.or.jp/)



「命の尊厳」

ごあいさつ



大本山光長寺貫首  
石田 日信

法華宗信報をとおし皆様に御挨拶をする機会を与えられたことを有難く思います。この度、編集部は「命の尊厳」をメインテーマとして信報を編集されるとのことで、わかつてじるよう実際にはとてもむづかしい、そして大切な問題だと思います。

法華經の有名な文に「我深く汝等を敬い敢えて驕慢せず」という言葉があります。文の意は、誤解を恐れずに

一例をいえば、例えば電車の中で重い障害をもつた人の隣の席が空いていた。「ためらいなくすっとその席に座りますか、どうぞ」といいます。そのような行為は菩薩様でも何とかの違和感、心の努力を要する行為なのだと、いうことが「敢えて」という言葉に読み取れないでしょう。

法華經の有名な文に「我深く汝等を敬い敢えて驕慢せず」という言葉があります。文の意は、誤解を恐れずに

法華經に「蓮華の水に在るが如し」という文があります。足を泥田にふみしめながら、しかも清淨なる華を咲かすバスを意味します。曰蓮大聖人は「淨き」と蓮華にまさるべきや」と仰せられ、自らの名前の一宇とされました。

現にあるこの社会を離れて人の生きる場はありません。その中で世相をいい訳にせず、血ひの志操を守つて生きて行くといふことは、高潔な矜持を要する」と思っています。そして「汚泥に染まってしまってはいけないよ」と励ますられてくるように思っています。

私は日本が世界に誇り得ることの一つは、日本の年金・医療費等の社会保障制度だ

法華經に「蓮華の水に在るが如し」という文があります。足を泥田にふみしめながら、しかも清淨なる華を咲かすバスを意味します。曰蓮大聖人は「淨き」と蓮華にまさるべきや」と仰せられ、自らの名前の一宇とされました。

有情の第一の財は命にはすぎず、此れを奪う者は必ず三途に墮つ。……されば殺生をなす者は三世の諸仏にすてられ、六欲天も是を守ることなし。

〔主君耳入此法門免與同罪事〕  
(定遺八三三頁)

法華宗教学研究所長  
大平 宏龍

これは文永十一(一一七四)年九月二十六日付で、曰蓮聖人が、四条金吾に出された手紙とされています。内容から「主君の耳に此の法門を入れて与同罪を免がるること」という長い題名がつけられています。四条金吾から「主君の江馬光時に法華經の信心を勧めたけれど聞き入れられなかつた。」との報告を受けた聖人が、その諫めによつて、四条金吾が江馬氏と共に地獄に墮ちることを免れたのは有難いことであるが、その為に命を狙われないように注意しなさいと心配した手紙です。そこで、命の大切さから説き始められています。

宗教学者の山折哲雄氏は「小学生のとき、親戚のおじいさんの葬式の後、近所の老僧が六道の話をしてくれた。衆生がその行いによって死後に住む地獄・餓鬼・

宗祖の御教え



## 目次

### ② 「ごあいさつ」

大本山光長寺貫首  
石田 日信

「宗祖の御教え」  
法華宗教学研究所長  
大平 宏龍

### ④ 【特集】

日弁大正師第七百遠忌奉讃  
北茨城 成願寺  
鈴木 順隆

### ⑤ 誰でも分かる

現代に生きてる教学  
「尊厳ある人生」  
法華宗興隆学林 学監  
株橋 祐史

### ⑥ 信仰日記 その道一筋

「樹の命」  
千葉県長生村本興寺檀徒  
総合建設業「木組」  
鶴岡 益雄さん

### ⑦ 現代の諸問題

「ほとけさまにみつめられ ①」  
日種 崇人

### ⑧ 「菩薩行研究所」始動しています

菩薩行研究所長  
原井 慈鳳

## 表紙写真

撮影 平成17年10月 於、グアム  
アシスタントの時、撮影の合間にコンパクトカメラにて撮影したものです。現地の子供たちは、純粋無垢で、「僕を撮って!!」といわんばかりにアピールしてきました。私は反射的にシャッターを切った、というより撮らされた感覚です。  
子供たちとコミュニケーションがとれた瞬間の、愛しい笑顔が私の宝物です。

写真家 小高 雅也

と考えております。これを支えている土台の一つは、人あっての己、先祖から子孫までという永いスパンの中でものを見る、という仏教が培つた人生観ではないでしょうか。官僚の怠慢を一因として今この社会保障制度がぐらつきだしています。バカバカしい、自分のことは自分でいう思想が肥大したら、社会保障制度などたちまち崩壊します。そしてサブプライムローンの焦げつきがあぶりだした経済大国アメリカの貧困問題は、明日の日本の問題になってしまふ、智恵をしぼらなくてはなりません。

命とか人格の尊厳という事は、一人の人間の存在を守る、一人の人間の生存を守るという「公」の存在に裏付けられています。政府がそういう「公」の役割を果たす事を大切にするということの根本は、国民の思想・国民の心の問題になるのではないでしょか。

日々テレビは田をそむけるような「ユース満載の世相」です。汚泥に例える世、濁世(まよせ)末法(まよばつ)です。「今の世はこんなもの」と納得してしまっている我々も濁世に汚染されてしまつた病人です。

幼児虐待も殺傷も保険料の滞納も、原因は人の心の荒廃という事に行き着くのでないでしょうか。私は日本人の心が壊れかかっていると恐れを抱いております。私の中に狼が住んでる、これは法華經の教えです。この事実に目を開かなければいけない、目を開いた者が力を合わせ、信心の鍬(くわ)をもつて日本人の心を育てる事に立ち向かわなければいけない。

未法だからこそ南無妙法蓮華經の良薬(りょうやく)を投じなればならない。あの手この手、異体同心、皆様の団結努力をお願いし、ご挨拶と致します。

聖人の殺生についての御考は更に法華經の信心と

の関わりについて展開がありますが、ともかく人間としてこの世に生まれたことの尊さは、いろいろな御文章で述べられています。幼児教育では端的に「人を殺せば地獄」と教えることが、子供ないし社会の将来の為に不可欠なことではないか、当今の社会をみるとどう思われるのですが、いかがでしょうか。

と考えております。これを支えている土台の一つは、人あっての己、先祖から子孫までという永いスパンの中でものを見る、という仏教が培つた人生観ではないでしょうか。

官僚の怠慢を一因として今この社会保障制度がぐらつきだしています。バカバカしい、自分のことは自分でいう思想が肥大したら、社会保障制度などたちまち崩壊します。そしてサブプライムローンの焦げつきがあぶりだした経済大国アメリカの貧困問題は、明日の日本の問題になってしまふ、智恵をしぼらなくてはなりません。

命とか人格の尊厳という事は、一人の人間の存在を守る、一人の人間の生存を守る

の滞納も、原因は人の心の荒廃という事に行き着くのでないでしょうか。私は日本

畜生・修羅・人間・天の六つの世界。(庚文のタマ)最上界(さいじやく)に行くのがい

かに難しかを説いた話にえらく感動して、小さな手を合わせた」(四国新聞「一日一言」平成十九年九月二十日)ということです。小さな子供には、例えば『人を殺すと地獄に落ちる』というような教育が必要と思われますが、近頃はすぐ科学的でないと何とか理屈を言つてゐるので難しげになります。しかし、この世に受けた生は、無条件で尊いものと教えなければならぬ。それは第一義的に重要です。科学(かがく)は、たとえば第一級の科学者であった中谷宇吉郎氏が、幼児の時はむしろ神話の世界にいた方が将来の科学教育の為によい(『中谷宇吉郎隨筆集』岩波文庫七三~八二頁取意)という意味のことを述べてゐるのが、眞の科学教育について、よい参考となります。

日蓮聖人は、無条件に、生きものの第一のたからは命であり、殺生は地獄・餓鬼・畜生の三途(さんす)の原因とされ、いついかなる時も仏たちに見守られ、四天王ないし他化自在天など、欲界に属する天の神たちも守つてくれないと断言されています。

聖人の殺生についての御考は更に法華經の信心との関わりについて展開がありますが、ともかく人間としてこの世に生まれたことの尊さは、いろいろな御文章で述べられています。幼児教育では端的に「人を殺せば地獄」と教えることが、子供ないし社会の将来の為に不可欠なことではないか、当今の社会をみるとどう思われるのですが、いかがでしょうか。

特集

# 日弁大正師 第七百遠忌奉讚

北茨城 成顯寺

鈴木 順隆



六百九十八年前にタイム

スリップいたします。

応長元年（一三一〇）六月二十七日の奥州多故新聞朝刊に『法華僧、他宗徒に襲われ殉教』といつ見出しだ

「昨二十六日上総国鷺巣村にある日蓮大聖人の教えを説く大本山鷺山寺の開山である越後阿闍梨日弁聖人は、七十三歳の老齢でありながら、弘通のため上総より常陸を経て奥州に歩みを進められ伊具郡櫻村にて辻説法中、突如当地の淨念寺に住む久六という男の毒刃に倒れられた。村民は仮の正しい教えを持ち、正義を説く師（正師）が刺し殺されるという事件に、おののき悲しんでい

る」との記事が見られます。

日弁大正師の御遺骸は、お伴の方々により現在の宮城县角田市より千葉県茂原市鷺巣の大本山鷺山寺にお帰りになることになりました。

ジリジリと焼け付くような太陽の下、険しい道を鷺巣に向かい進みます。茨城県高萩市赤浜（日弁大正師東北布教の拠点）にて休息しましたが、出発にあたり、御棺が地面に張り付いたように動かなくなりました。大正師はこの地に留まりたいのであるうと、この地で荼毘に伏し埋葬、その灰で御像をお造りいたし、御像のみが鷺巣にお帰りになりました。

史実として残っている事柄に、大正師は駿河國熱原郷にあつた天台宗の瀧泉寺の僧

り生國は駿河で熱原神四郎の長男という説や、桜町中納言重教の子・京都の生まれ、少納言藤原信成の孫で幼名を寅磨と称した。等々と伝えられています。かの水戸黄門公は主な法華宗門下寺院の縁起調査を命じました。

二十名は鎌倉に連行され、三名が拷問にかけられ首をはねられるという事件がありました。これを宗祖御在世中におこった門下最大の法難で熱原法難といいます。この事件の解決に奔走したのが日弁大正師です。

その後、鷺巣の大本山鷺山寺を根拠地として布教活動を開いたしましたので日弁大正師の流れを、鷺巣門徒と呼ばれるようになります。

で宥弁と号していました。

身延山中の日蓮大聖人に直参して日弁と名を与えられ瀧泉寺に住して布教活動をしていましたが、念佛者の謀略により信徒である農民二十名は鎌倉に連行され、三名が拷問にかけられ首をはねられるという事件がありました。これを宗祖御在世中におこった門下最大の法難で熱原法難といいます。この事件の解決に奔走したのが日弁大正師です。

誰でも分かる現代に生きてる教學

# 尊厳ある人生



法華宗興隆学林 学監

株橋 祐史

今日のように、殺人事件や死亡事故、あるいは環境破壊や異常気象などの生態系に関わる現象等が多発していくと、我々の人生自体が脅かされ、人としての寿命を全うするといふことが非常に難しくなってきました。誰しも安穏な一生を送りたいと思っているにもかかわらず、それはむなしい願望となってしまいます。

ここで、宗祖の次の言葉に改めて注目すべきです。「日蓮は幼少の時から仏法を学習してきたが、よくよく思うに人の寿命は無常であつて、吐く息は、吸いこむ息を待つ間もないくらいであり、風の吹く前の露のよ

うなもので、いつ散ってしまうかわからないものである。賢い人も、そうでない人も、老人も若い人も、すべていつ死を迎えるか定めのないことである。そこでまず臨終のことをよくわきまえて、その後で他の事を考えるべきである。(妙法尼御前御返事 定遺一五三五頁)と。すなわち、仏法はいかに寿命を全うするかを教えるものであり、とりわけ臨終のことをよくわきまえるべきであると示されています。安穩な臨終を迎えることは、どのように生きていいくのかに関わっています。先日、法華信者であつて、ホスピス部門で終末医療を担当してい

る医師から、興味深いお話を聞きました。「まず信仰を持ち、今の生命が死後の生命に連続していることを心得て、臨終や死後の事を託せん人が身近にいる患者は、実に穏やかに終末を迎えることができます。たとえ医学的には苦痛の伴う状態であつても、不思議に、自然に自ら苦痛を和らげる能力があり、他の例に比して鎮痛剤の投与が少ないものです。」というものです。

日常より、法華経の心を知る僧の下で信仰し、お題目を唱えるという生き方は、知らず<sup>はか</sup>謀らず、自然にこのような状態に安住出来るものなのです。このことは、

人生最後の臨終にあたり、お題目を唱えることは、一生の間ないし無限の過去からの永きにわたる悪業も、皆消滅して変じて仏の種子(たね)となる、との確信を頂戴できます。このように、臨終に恐れが無いことこそ、尊厳に満ちた眞の幸福な人生と言つことができる 것입니다。

## ほとけさまにみつめられ ①

日種 崇人

「戦争を知らない子供たち」が合唱コンクールの定番曲であった時代、その頃学生生活を送った世代も半世紀を生きてきた。「お父さんは平和で幸せな時代を過ごしたのね。いいな～」

「どういう意味?」

「これからも平和であってほしいけど、私が50才までのあと35年間、その保証はないわ」

中学生の娘の言葉に息をのんだ…。なるほど人類の歴史をひもといてみて、地球上で戦争という惨事が存在しない時は無いに等しい。大戦争はなくともどこかで人の命の奪い合いが行われているのが、悲しいかな現実の世界。このことを理解しての言葉なのか…。そう言えば彼女、ある宿題のポスター制作で「地球」を紙面いっぱいに描いていた。そしてそこには「宇宙から見たら国境はない」とのコピーが添えてあった。

「人間にはいい人とそうでない人がいると思う。その区別は、国や人種や宗教をものさしとするんじゃない。いい人ばかりだと戦争は起こらないのよ。そう思う」

日蓮大聖人の教えの基本に

「十界互具」という法門がある。真理としてこの世界には十の世界が存在している。最下位世界である地獄界から順に餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、そして菩薩界へと昇華し最高位が佛界となる。私たちは人間界から菩薩界、佛界へのぼりつめるために人間界の命を生きぬくのである。これが仏教の本義であり、仏教徒の使命である。この十の世界がたがいの世界に内在していると解釈した法門が先に挙げた「十界互具」である。私たちが佛界へ征くことが可能なのは、私たちの中に佛界が内在しているからであり、私たちが地獄界へ墮ちるのは、私たちのなかに地獄界が内在するからである。内在する佛界・菩薩界の占める比率が大きい人間は「いい人」であり、内在する地獄界・修羅界の占める比率が大きい人間は「悪人」として人間界に存在していることになる。戦争をこの世からなくすためには、「いい人」が多くなればよいのである。

彼女は「そうでない人（悪人）」に、「いじめ」という世界に引き込まれた経験があった。

小さな小さな独裁国家で一年近く暮らしたのだ。『いじめ』におびえ、学校を休む理由を告げた際、彼女の母親は担任の先生にこういわれた。

「この問題を大きくすると『いじめ』はひどくなりますよ。そしていずれは不登校になる。実際にその加害者の子の『いじめ』を取り上げて、スマイルームに通った被害者の子がいます」と。

母親は脅迫された気持ちになった。彼女と母親は、この小さな小さな独裁国家で「ころ」に何度も何度もナイフを刺され、苦しみの日々を送った。

中学生における『いじめ』の構造はこうだ。まず、大人社会と自分達を隔離し、そこがかっこいい社会であることを皆（仲間たち）に認めさせる。つまり、大人に相談するとか、親と親しくすることはかっこ悪いこと、「もう私たちは子供ではないんだから」という理屈を皆に洗脳させるのである。そして、独裁者（加害者）は側近といふか親衛隊を結成し、ターゲット（被害者）に攻撃を始める。決して一対一ではない。側近がいるから『いじめ』はその悪に力を増すのである。その意味では、側近の子も加害者と判断すべきである。

「いい人」が多くなれば戦争がなくなるように、『いじめ』を

# 樹の命

ちようせいむら  
千葉県長生村本興寺檀徒  
総合建設業『木組』鶴岡 益雄 さん

なくすには、「いじめる子」をなくせばいいのである。「いじめる子」の改心がない以上、「いじめる子」はターゲットを替える方法を選び続け、その加害者の前には『いじめ』は存在し続ける。彼女の場合、加害者の「あいつがチクった（親に告げ口した）から（いじめをすることを）やめてやる」で、学校側からすれば一応の決着となつた。

私は、この加害者と一緒に、本堂でお題目を唱えてみたい。「ここには、ほとけさま、日蓮大聖人、そしてあなたのおじいちゃんが来てますよ。仏さまとご先祖は常にあなたの行動をみていらっしゃる。あなたがどこで何をし、何を言っているか、すべてお見通しです。本当かどうか確かめますか？ならば、一緒に南無妙法蓮華経を大きな声で唱えましょう。何度も何度も唱えましょう。ほとけさまの姿が見えて、あなたのおじいちゃんの声が聞こえるまで唱えましょう」

彼女（娘）は、南無妙法蓮華経を唱えることで『いじめ』世界から戻って来た。「保育所の時、おじいちゃんが病院で言った。『苦しいとき、かなしいとき、おじいちゃんの位牌の前で南無妙法蓮華経を唱えなさい。きっとおじいちゃんまもが護つてやるから』と」

## 「自分

たちは木の御蔭で生活出来るのだから、木を大切にしないとバチがあたる。」今は亡き父の口癖である。大工であった父は、給料をもらうと楨（千葉の名産で長生村の樹にも指定されている）の苗木を買っては庭に植えていました。これは現役の大工を引退した後も続きました。これまで、生活の糧としてお世話になった樹々への恩返しのように思います。今もこの庭を眺めていると、トンカチでは無く剪定ハサミを腰にぶら下げて、植木の手入れをしている姿を思い浮かべます。

そんな父を見て、私も同じ大工の道に進みましたが、若い頃はなぜ樹を植えるのか理解出来ないでいました。それが、いつの間にか私も苗木を買っては庭に植えるようになりました。もちろん、父が植えた樹も元気に育ち「ご先祖からの贈り物」として大切に守り続けています。

私は大工となり30年になります。その間に切り刻み、使用してきた木は計り知れません。仕事柄、建築材料として木材の質や直段ばかりが気になりますが、樹々の命を絶つことで、私たち大工は生かされているということを忘れてはならないと思います。そして、それぞれの木の特性や性質を見極め、適材適

所に使用することで、快適な空間を成し、木の命がつながるのです。

木には二つの命があるといわれています。一つは、自然の中で生育している間の樹齢。もう一つは、用材として生かされている間の耐用年数です。私たち大工は、樹々の命を絶つことによって生計をたて、その木を最大限に生かして住み良い家を建てなければならない、そうすることによって樹木の二つの命が生かされると思います。

国産の木にこだわる訳ではないのですが、やはり育った風土に近い環境で取り扱った方が木々は輝き、人にも優しい空間が生まれます。人件費と時間ばかりかかる林業が衰退してきました。嘆かわしいことです。

植林をしましょう。少し前の日本に戻り、自然と共に存して初めて本来の工コが実現するのではないか。そうすれば、自ずと住環境は改善されて人体に悪影響を与える物質も減ります。

最近は、職人が少なくなってきました。道具を大切にして上手に使い、大切なものを後世に伝えるために、生命を吹き込んだ建物を創造すること、手間を惜しまず、あらゆるものを見重んじ、大切にすることが私の役目だと思います。

# 「菩薩行研究所」始動しています

菩薩行研究所長

原井 慈鳳



宗祖・開基・先師聖人報恩奉  
讚会の事業の一つとして「菩  
薩行研究所」を一昨年立ち上  
げる事ができました。

当宗が掲げる「菩薩行の実  
践」とは何か。そんな声が聞  
こえてきました。菩薩行とは  
人の生き方です。だから決ま  
った形はありません。人は何  
のために生きるのか。それを  
問うているのです。

「釈尊出世の本懐は人のふる  
まいにて候いけるぞ」とは宗  
祖の金言。司馬遷の書に「天  
の与うるを取らざれば却って、  
その罰を受く。時いたりて行  
なわざれば却ってその禍を受  
く」とあります。

宗祖の与えられた遺命を受  
けなければ仏教の実現は空し  
く、今この時行わなければ世  
の全ての者に将来の禍を招く  
事、必定です。



千鳥ヶ淵戦没者慰靈法要

の中の「イジメ」問題に対する  
対策を実践する寺院のケース  
から宗門の対応も考えており  
ます。

当研究所設立と環境問題へ  
の取り組みに対し、先般報道  
機関から科学者と共に取材を  
受け、科学者から仏教がもっと  
社会の中で環境悪化を止める  
役割を果たして欲しいとの要  
望を受けました。

科学技術と市場経済の利益  
のみによって動く現実の社会  
に対して政権の政・官の人々は  
止揚の見識を失っています。

「立正安国論」は宗祖が時  
の政・官に対して発したと同  
時にその精神は今の世にも發  
せられているのです。「立正」  
から「安国」に至る我等の尽  
力こそ菩薩行の実践であると  
考えるのです。

皆様と共に「信心・奉仕・布  
施」を旨として当宗教の現  
代に於ける実践を弘めて参り  
ましょう。

合掌

編集後記

お盆号から私達千葉教区が担当になりました。印刷費送料の高騰により今号の紙面が少なくなってしまいました。しかし、工夫を懲らし前半は縦書きにして教学を、後半は横書きとして信仰や現代の諸問題を取り上げ、前後表紙のように編集し活字も変えてみました。「命の尊厳」というメインテーマにそって執筆していただきましたが、テーマがあまりにも大きすぎて、8頁では収まらず、次号も同じ方向で編集したいとおもいます。

編集長 佐藤正純

法華宗信報

No.126

平成20年7月1日発行 発行人／原井 慈鳳 編集人／佐藤 正純

編集部／〒299-4341 千葉県長生郡長生村宮成373-1 清泰寺内 TEL.0475-32-0402

発行所／〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町2-19-1 法華宗宗務院 TEL.03-5614-3055

印刷所／株式会社マックス